

プラハで学んだこと気づいたこと

前在チェコ日本国大使館付属 プラハ日本人学校 教諭
滋賀大学教育学部附属特別支援学校 教諭 木村 明子

キーワード：プラハ、教育実践、平和学習、音楽会、価値観

1. はじめに

2014年4月から3年間、チェコ共和国のプラハ日本人学校で勤務する機会を頂いた。そこで学んだプラハの歴史や文化、また教育実践などについて、まとめてみる。

2. チェコ共和国プラハについて

百塔の街と呼ばれるプラハ。その中心部には今でも近代的なビルディングは少なく、教会や修道院が多く建ち並び、中世の佇まいを所々に残している。その中でも、トラム（路面電車）が駆け巡り、石畳が続く狭い路地と、開けた広場が不規則に現れる旧市街は、ユネスコがいち早く世界遺産に登録した。2度の世界大戦でも被害を受けず、一時は神聖ローマ帝国の首都でもあったプラハは、長い歴史と味わい深い文化が刻まれた、ヨーロッパでも人気の高い観光都市となっている。



プラハ城

チェコの人々は自分たちの国家が存立すること、チェコ語が公用語であることに大変大きな誇りを持っている。というのも、ヨーロッパの十字路とも交差点とも呼ばれたこの地域

には、常に大きな勢力が支配の手を伸ばしてきたからだ。オスマントルコ、ハプスブルグ家、ローマカトリック教会、ナチスドイツ、ソ連共産党がそれである。それらは、チェコ人が国を作ることやプロテスタントを信仰すること、チェコ語を話すことを認めないことがあった。1989年の「ビロード革命」を経て、この国はようやく民主化が進められた。大きな勢力から解放されて自分たちの手による国づくりが始まった。1993年には、スロバキア語を話す地域を分離し、チェコ共和国が成立する。更に、2004年にはEUに加盟し、それ以降の経済的な発展は人々に自由で豊かな生活を提供してきた。

毎年5月には「プラハの春音楽祭」が開催される。オープニングでは大統領列席の下、スメタナの「我が祖国」が演奏される。私も参加したが、この国の苦難の歴史と人々の祖国への思いが伝わってくるようで、大変感慨深いものがあった。

3. 現地理解と関わったプラハ日本人学校の教育実践

前述したような、歴史的背景と文化的風土は、本校の学校目標や学習内容と無縁ではない。いくつかの実践例を紹介することにしたい。

(1) 街歩き（ウォークラリー）・写生会

5、6人のグループを作り、問題を解いたり、次のチェックポイントに地図を見ながら移動したりする。写生会では、プラハの歴史的建造物や町並みを描きながら、その美しさを自身の作品に残している。

(2) チェコ語教育

本校では、会話や音楽、遊びを通じて言語とその背景にある文化について学んでいる。そして、その成果は学習発表会や地域のイベントで発揮されている。

(3) 現地校との交流

多くは相互訪問の形をとり、お互いの伝統芸能、伝統料理、文化や歴史をテーマにしたクイズなど、様々な方法で交流を実施している。近年は教師間の交流も実施し、本校の教員が現地校で、現地校の教員が本校で授業を行っている。

4. 平和学習

第2次世界大戦で日本は大きな被害を被ったが、ヨーロッパにも戦争の爪痕はたくさん残っている。大戦中、チェコ共和国のほとんどはドイツに併合されていた。レジスタンスの報復として村ごと消滅し、抹殺させられた所もある。毎年慰霊祭には、本校の生徒も参加させて頂き、子ども像の前で歌を捧げ、千羽鶴を奉納している。また、中学2年生はベルリン・ポツダムに修学旅行に行く。ポツダムではポツダム会談が行われたツェツィーリエンホーフ宮殿にて、会談の様子を学ぶ。私はこの地に来るまで、なぜ、ポツダムで会談が行われたのかを知らなかった。理由は簡単で、当時予定していたベルリンが空襲で壊滅的な被害を受けたために会場を変更したとのことだった。当時宮殿はソ連軍によって接収されており、会談を準備したソ連当局の判断により、歴史的な会談はポツダムで行われることになった。



ユダヤ人収容施設 テレジーン

私自身は歴史に詳しい方ではないが、プラハに来て戦勝記念日、チェコ国家の日など歴史にまつわる祝日を調べて生徒に紹介したり、修学旅行の事前学習の準備をしたりする中で、ここに居ることが、学びに繋がることを実感した。海外で暮らしているだけで、日本には気付かないことが山のようにあるということだ。

私に学びがあるように、生徒達も様々な歴史的建造物を訪問し、平和や人権についての考えを深めている。

5. 音楽会

プラハと言えば音楽。音楽はこの街の誇りであり、日常でもある。年間を通じて、音楽会やオペラ等が開演されている。音楽会の中でも、「国際音楽祭ヤングプラハ」は、本校の会場の1つになっており、児童生徒は居ながらにして、一流の音楽に接することができる。1年目はバイオリニスト、2年目はチェロリスト、3年目はジャズボーカリストと様々なジャンルの方が来て下さった。毎年恒例になっているのは、音楽家たちの演奏の最後に生徒達の合唱とコラボレーションする企画だ。ほとんどぶっつけ本番に近い形の演奏になるが、感動のフィナーレになる。

6. 終わりに

3年間のプラハの生活で自分の価値観が変わった。日本では当たり前の事がここでは、そうではなく、またその逆のこともあった。その繰り返しの中で、違った視点から物を見ることが、自然に出来るようになった。また、プラハの文化に触れることが、自国の文化を見直すきっかけとなり、日本の文化に誇りを持つようになった。何かを知ることは、知らないことを増やすことだと思う。不自然な言い方だが、何かを知れば知るほど、知らないことが増えてしまうということだ。これまで知っていたことの先にまだまだ知らないことがたくさんあることに気づく。学校教育においても、日本の学校と同様に本校でも、現地に応じた教育活動がなされていることを知り、今までの先輩方の努力に感謝した。文化面でも教育面でも、金子みすゞさんの詩の一説にある、「みんな違って、みんないい」を実感した3年間だった。